

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	高田 洋平
論文題目	ネパール・カトマンドゥにおけるストリート・チルドレンの日常的実践に関する民族誌的研究		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、ネパール、カトマンドゥのストリートで生活する子どもたち、ストリート・チルドレンの日常的実践を民族誌的に明らかにすることを目的としている。これまでのストリート・チルドレンをめぐる表象が、かれらを被害者あるいは福祉・救済の対象として受動的に捉える立場と、逞しい抵抗の主体として過度にその主体性を強調する立場とに二分されてきたことを背景に、「ストリートの生活者」という観点から、その創造的側面と脆弱な側面とを包括的に捉えようとするものである。</p> <p>第1章では、ネパール社会と調査地であるカトマンドゥの歴史的なコンテクストについて概観したのち、第2章ではストリート・チルドレンの社会構造的な背景としてネパールの教育制度および児童福祉を概観している。統計資料から初等・中等教育における高い中途退学率が示され、中途退学率がストリート・チルドレンという社会現象の構造的要因になっている可能性が明らかにされる。また1989年に国連で採択され、1990年にネパールで批准された「子どもの権利条約」と、これに続いたネパール国内での子どもの権利擁護運動が、ストリート・チルドレンが児童福祉の対象としてますます注目される背景となったことも論じている。</p> <p>第3章では、ストリート・チルドレンが生活するカトマンドゥのストリート空間を素描している。第3章を貫く問いは、1990年代以降、ストリート・チルドレンが利用できる福祉サービスの拡充がなされたにもかかわらず、なぜストリートで過ごす子どもが一向に減らないかである。この問いに対して、ストリートや空間についての人類学的議論を参照しながらカトマンドゥのストリート空間を分析した結果、そこには管理の厳しい「閉じられた空間」と、比較的管理がゆるく多様な「居方」を許容する「開かれた空間」との共存状態があることを示した。さらに伝統的建築物として「ダルマ・シャーラー」を取りあげ、そこにある種の滞留を許すようなストリート空間が成立していることも指摘している。以上のようなローカルな特質をもつカトマンドゥのストリート空間があるからこそ、子どもたちはストリートで生活することができるのだと論じている。</p> <p>第4章ではストリート・チルドレンがストリートに来る背景について、ライフ・ヒストリーを用いて検討している。ストリートへの旅は、これまで「貧困」や「家庭的不和」といった理由で説明されることが多かった。しかしこれは都市に出てきた理由を説明する一方で、なぜ彼らが施設ではなくストリートを選ぶかについては十分に説明</p>			

できていない。本章のライフ・ヒストリーの分析からは、いわゆる貧困層のみがストリート・チルドレンになっているわけではないことが明らかにされ、かつ薬物やタバコなどの誘因によっても説明しきれないことが示される。そこで、何かに魅了され、必ずしも合理的選択には拠らないような行為選択をあらわす「体験選択」という概念を用いて、彼らのストリートへの旅を分析するという、新たな視座を提示している。

第5章ではストリートでの彼らの生活について、日常的実践と戦術に焦点を当てた記述・分析をおこなっている。ストリート・チルドレンにはこれまでその福祉的支援や社会的逸脱に関心が集まる一方、日常生活には十分な関心が集まってこなかった。申請者は彼らと時間を過ごすなかで、例えば、一見何の目的もなく歩き回っているだけの行為が、ストリートに潜在する「仕事」を探りあてることにつながっているなど、社会文化的な技術によって編成される生活実践を明らかにしている。そして都市のストリートのなかでいかに「うまくやっていく」のかを民族誌的に解明している。

第6章では彼らの暴力と傷つきやすさについて扱っている。近年、発達心理学などにおいては子どもを受動的な社会化の対象とするのではなく、価値を積極的に生産する能力をもつ存在とみなすようになってきた。しかし、そのような「積極的な」子ども像にのみ拠ってはいは、とりわけ困難な状況にある子どもを対象とする場合、かれらが被る暴力や傷つきやすさといった側面を見落とすことになる。そこで本章では、人類学における暴力の議論を参照しながら、彼らがいかに暴力と傷つきやすさを経験しているかを記述している。また、親族や様々な媒介者を通して彼らがストリートから離れていく事例も示される。

終章では、本論文での記述と分析を振り返り、どのような介入が必要であるかという問いを一旦括弧にくくって、ストリート・チルドレンの日常実践そのものをきめ細かに理解する必要性について再度論じる。

(論文審査の結果の要旨)

本論文はカトマンドゥのストリート・チルドレンの日常実践に民族誌的に迫った論文である。申請者は以前、ストリート・チルドレンの支援をするネパールのNGOでボランティアをしており、そのときに知り合った子どもたちを通して、ストリート・チルドレンの生活世界へと入りこみ、かれらの日常実践を描きだしている。

本論文の学問的意義として以下の三点が挙げられる。

第一に、ストリート・チルドレンの民族誌としての貢献である。カトマンドゥのストリート・チルドレンについてはある程度の研究蓄積があるものの、しっかりとした参与観察にもとづいて、かれらの日常生活についてこの論文のように親密にまた生き生きと記述できているものはこれまでなかった。そこには、かれらが道のくぼみを利用してビー玉遊びをする様子や、ゴミ拾いの実践、頼まれたわけでもなく工事現場の交通整理を試みたり、乗り合いタクシーの客寄せをするなどして収入を得る様子が描かれる。しかし、本論文はかれらの知恵や創造性などの肯定的な側面だけを描くのではない。シンナーやその他の薬物使用についても描かれる。また申請者は昼間だけでなく、夜から朝にかけてもかれらと共に過ごし、そこで目撃した激しい身体的暴力についても記述し、かれらの庇護者でもありながら、酔って激しい暴力を振るうこともある年長者と、ストリート・チルドレンの複雑な関係性についての厚い記述と考察をおこなっている。

第二に、ストリートに出てくる子どもたちの行為のとらえ方についての理論的考察である。都市で路上生活者となる子どもたちに関しては、伝統的にプッシュ・ファクター（貧困、劣悪な家庭環境）とプル・ファクター（都会の魅力）から議論することが多い。しかし、申請者は、かれらが必ずしも劣悪な生活環境から逃れてきたとは限らないことを示しつつ、かれらが何故都市に出てきたのかと聞かれたときによく言う、「なんとなく」という言葉に注目する。申請者はここで、高橋義典が提起した「体験選択」という概念を援用しつつ、合理的選択とは異なったレベルで、かれらの行為を記述し了解していく可能性を指し示している。

第三に、ストリート・チルドレンを通して、カトマンドゥという都市空間の特徴を描き出したことである。カトマンドゥにはダルマ・シャーラーなど巡礼者や旅人がだれでも滞留できる伝統的建造物があるが、ストリート・チルドレンと行動を共にすることによって、そのような建造物に限らず、家を出てきた者、家を持たぬ物の滞留を許すようなさまざまな「開かれた空間」が発見されていく。これは、特に2000年代以降、急速な人口流入と都市化によって激しく変貌するカトマンドゥについての貴重な資料となるものである。

以上のように、本論文はカトマンドゥのストリート・チルドレンと親密な関係を構築してかれらの日常生活について観察を行った優れた民族誌であり、南アジア地域研究や

都市研究に寄与するところが大きい。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成29年1月24日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。